

がん治療の3つの柱は、手術、放射線治療、抗がん剤などの薬物療法です。

この3つの治療法のなかで、放射線治療は125年、抗がん剤は約75年の歴史しかありません。一方、がんの外科手術の起源は、四大文明の時代にまでさかのぼります。

古代エジプトのパピルスには、乳房の腫瘍を切除した記録が残されています。また、古代ギリシャの歴史家ヘロドトスも、ペルシャ帝国のダarius大王の妻の乳がん手術を記録しています。

レントゲンもコンピュータ断層撮影装置（CT）もなかった時代、洋の東西を問わず、がんと言えば、視診、触診で診断可能な乳がんを指し

## がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

# 全身麻酔の乳がん手術は日本発

ました。がんの外科手術もまた、乳がんを中心に続けられてきました。

しかし麻酔がない手術は拷問です。痛みに耐えかねて泣き叫び、暴れる女性を押さえ

つけて行う手術は、うまくいくはずがありません。治療結果も惨たんたるものでした。

世界で初めて全身麻酔を使った乳がんの手術が行われたのは日本でした。

前回も紹介しましたが、江戸時代の医学者「華岡青洲」は、1804年に世界で初めて、全身麻酔による乳がんの手術を行ったことで有名です。西洋で全身麻酔が始まるより40年以上も前のことです。

青洲の全身麻酔は、西洋式ガスの吸入や静脈からの薬物注射とは全く違いました。

朝鮮アサガオやトリカブトなど、自宅兼医院だった「春林軒」（和歌山県紀の川市）のまわりに自生していた菓草を

調合した「通仙散」を使ったものでした。

私は、科学者でなければ名医にはなれないと思っ

て、青洲も「実験科学者」でした。動物実験を繰り返したため、春林軒のあった平山の里から犬が消えたと言われたほどです。母の於継と妻の加恵の協力を得て、人体実験を繰り返し、20年かけて通仙散は完成されました。しかし、加恵は副作用のため失明してしま

います。この経緯は、有吉佐和子の小説「華岡青洲の妻」でもつとに有名です。

青洲に魅了された私は、生誕地の紀の川市で、中学生を対象にしたがん教育を毎年、行ってきました。

次回は青洲の乳がん手術を紹介したいと思います。  
(東京大学特任教授)